

# 情緒の発達と健康人

郡山女子大学教授



森

一

## 〔筆者紹介〕

森

一・もりはじめ

大正 十三年 青森県三戸郡田子町に生まれる  
 昭和二十七年 東北大学理学部生物学科卒業  
 〃 〃 〃 宮城県仙台第一高等学校教諭  
 〃 二十九年 福島県立医科大学附属中央研究所助手  
 〃 三十年 福島県立医科大学進学過程講師  
 (附属中央研究所兼任)  
 〃 三十三年 福島県立医科大学助教(生物学担当)  
 〃 三十六年 医学博士  
 〃 三十九年 福島県立医科大学退職  
 郡山女子大学家政学部教授(生物学担当)  
 日本動物学会、日本民族衛生学会、日本癌学会、日本遺伝学会、日本電子顕微鏡学会、日本細胞生物学会、大気汚染研究全国協議会、熱帯医学会で、学会発表・論文が

私の書斎の机にはいつもきれいな花が飾ってある。娘がこまめに花を挿しかえてくれる。医大、そして今の女子大の私の研究室にも花の姿が目に入る。小学生の頃、母が「学校へ持つておいで」と庭の草花を切ってくれた。その花は担任の先生に上げるか、自分で教卓の花瓶に飾るかした。幼い頃から「なんでこんなに花は美しく咲くんだろう」と思っていたが、ある本に「それは、花は自分が美しいのを知らないからだ」と書いてある一節が、たいへん私の心をとらえた。

小学五年生の夏休みの朝、父は用事で隣りの岩手県の福岡町(現在は二戸市。青森県と山道でつながる)へ出かけるのとこのとで、喜んで同行した。用事が済んで、さらに町から離れた水力発電所を見物して帰路についた。重い足をひきずって峠から町の灯が見えた時は既に星空。疲れてしゃがんだ私に父は「よいよい。家からフトンを持ってくる。ここで待っている」。気をとりなおして我が家に辿りついた。この時に歩いた往復五〇kmが私の最長歩行記録となった。

昭和二十九年四月、医大の附属中央研究所に助手として赴任。所長(初代・大里俊吾学長)は五分間でも絵を描く(春郊と称した)主義で、時には郊外散策、時には学会の後で、神社仏閣を訪ね、そのお供をした。そのうちに気づいたことがある。山